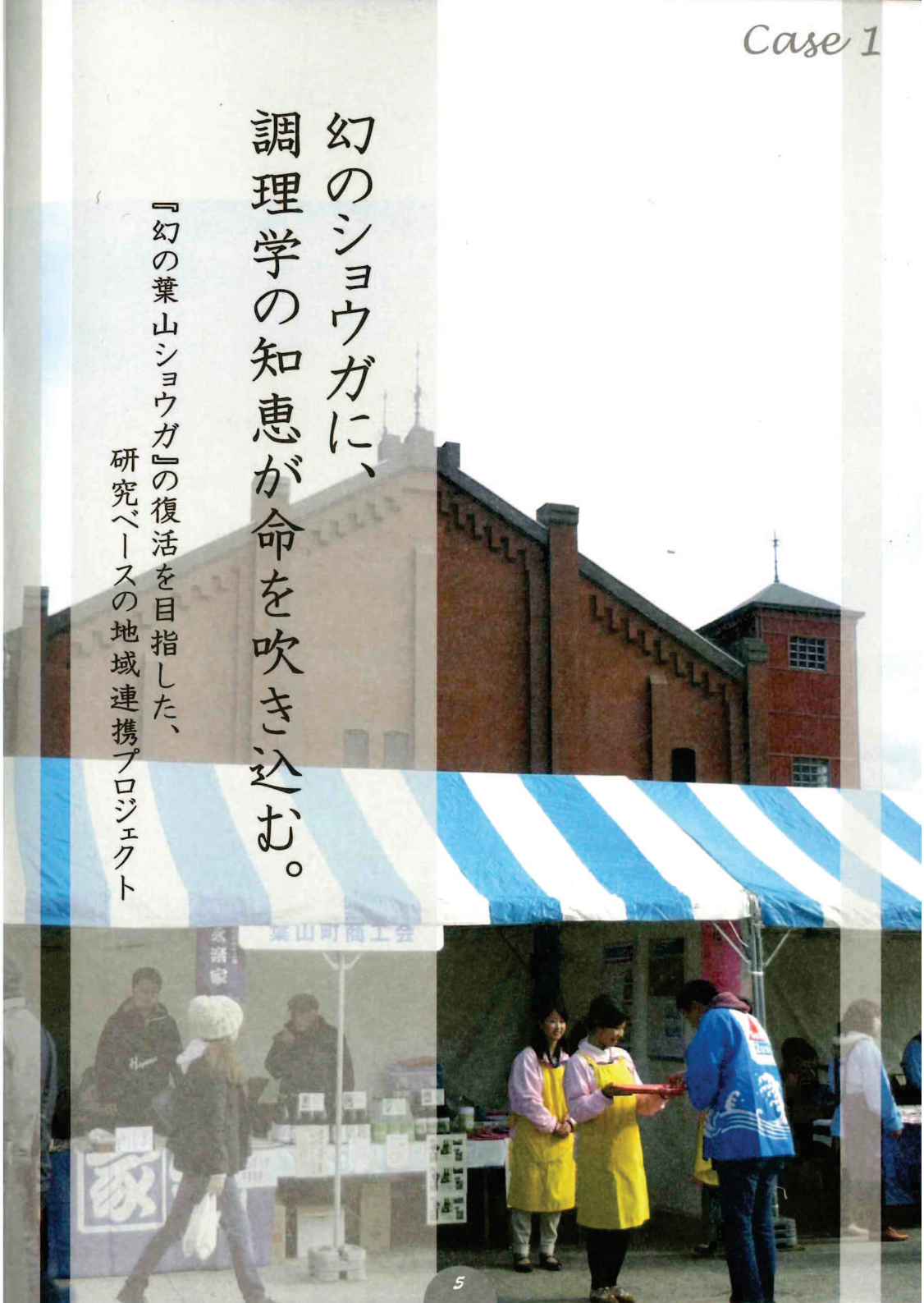
# 幻のショウガに、調理学の知恵が命を吹き込む。

## 『幻の葉山ショウガ』の復活を目指した、研究ベースの地域連携プロジェクト








### 葉山ショウガは高値で取り引きされていた？

神奈川県三浦半島の付け根に位置する葉山町は、御用邸やヨットハーバーを擁し、海と山に囲まれた閑静な小さな町だ。観光地のイメージが強い葉山町だが、その昔は農業も盛んで、中でもショウガは、昭和三〇年代まで同町の主要な栽培作物のひとつであった。特に長柄地区と上山口地区で栽培されたショウガは品質に優れ、市場でも高値で取り引きされていたという。しかし、今では栽培農家が減少し、すっかり幻となってしまった。

そこで、葉山町商工会ではショウガを用いた商品開発を推進することとした。ショウガ利用商品が普及することにより、葉山町がショウガの産地であったことが思い出され、かつてのようにショウガの栽培が盛んになり、再び同町の特産品として広まっていくことが期待された。

こうした背景から、葉山町商工会と本学調理学研究室の連携による、葉山ショウガを用いた商品開発プロジェクトが平成二四年四月よりスタートした。

### プロジェクト概要

●テーマ
葉山町の商店等での販売を目指して、葉山産のショウガを用いた商品開発を行う。

●パートナー
葉山町商工会（会長　柳 新一郎）

●担当教員
小口悦子　教授
（現代生活学部生活デザイン学科）

●担当学生
遠藤良恵、西橋綾香
（家政学部現代家政学科4年）

●実施期間
平成24年4月～平成25年3月

## 現地を視察し、大学ではさまざまなショウガ利用商品を試作

本プロジェクトは、調理学研究室(小口悦子教授)に所属する遠藤良恵さんと西橋綾香さんが担当した。二人は、それまで、葉山町がどこにあるかも知らず、ショウガにも特段の関心はなかったという。そこで、まずは、葉山町を知ることからスタートした。五月に葉山町を訪問し、町の様子を見つつ、ショウガ畑を視察した。

一方、大学においては、既存のショウガ利用商品に関する調査と並行し、収穫され始めた葉山産のショウガを用いて、さまざまな商品の試作を試みた。クッキー、羊羹、スイートポテト、おはぎ、かりんとう、ジンジャークランチ、佃煮、わらびもち、パウンドケーキ、ジンジャーエール、チョコレート、ジンジャーソルトなど、自分たちが作りたいと思ったものを中心に七〇種以上を試作した。試作と改良を繰り返しながら、精度を高め、候補となる商品を絞り込んでいった。

## 地域のイベントに参加し、試食&アンケート調査を実施

プロジェクトでは、地域のイベントに参加し、開発商品の試食とアンケート調査を実施した。イベントに参加することにより関係者以外の第三者の率直な意見を聞くことができる。最初のころは緊張もあり、自分たちの開発した商品を勧めることにためらいがあったが、見ず知らずのお客さまから直接に「美味しい!」と声をかけてもらうことにより、自分たちの技術に確信を持つことができた。お客さまの声は、ポジティブなものもネガティブなものも励みになったという。また、お客さまや出店者など葉山町の人たちとの交流もあり、これまで以上に葉山町と葉山ショウガに対する愛着が深まっていった。

九月には「葉山ふれあいマーケット」に、十月には「ビッグ・ハヤママーケット」に参加し、十一月には、横浜赤レンガ倉庫で開催された「かながわ商工会まつり」にも参加し、横浜でも葉山ショウガをアピールした。



## 今後の展望、そして、プロジェクトから学んだこと

今回提案したいくつかの試作品のうち、ショウガの佃煮は高評価を得、商品化の検討が進められている。ジンジャーエールやアイスクリームも商品化の候補であり、いずれ、葉山町のお土産品として店頭に並ぶことが期待される。

プロジェクトが終了するとともに学生たちは卒業する。このプロジェクトに参加したことについて遠藤さんは、「商品開発は難しかったが、自分が作ったものを認めてもらえたことは自信になった。苦労の先に喜びがあることがわかった」と言う。西橋さんは、「思った以上にたいへんで、プレッシャーもあったが、大学生活の中でもっとも充実していた一年だった」と振り返る。さらに、地域連携研究は、たいへんなことが多いが、その分得ることも多いので、後輩たちにもぜひチャレンジして欲しいと言う。

プロジェクトで学んだことを糧に、四月からは実社会での新しいチャレンジがスタートする。

**KVA Column**

### 継続する地域連携プロジェクト

本プロジェクトは平成24年度にスタートしているが、葉山町商工会と本学との連携は、2年目となる。平成23年度は、葉山町の特産品である夏ミカンを利用した商品開発をテーマにプロジェクトを実施した。連携の成果に基づき、夏ミカン最中や夏ミカン羊羹などが既に同町内で販売されている。

地域連携プロジェクトは地域とのつながりの中で実施するものであり、地域の営みが継続していく以上、連携プロジェクトも1年限りではなく、一定期間継続することが望ましい。そのためには、パートナーとの良好な関係が必須となる。その点において、葉山町商工会とは、お互いの立場を認めあった上で、明確な役割分担に基づきプロジェクトを進めている。そのことが学生たちのモチベーションに、ひいては、成果に結びついている。良きパートナーに巡り合えることは、連携プロジェクト成功の秘訣のひとつである。葉山町商工会とは平成25年度も連携を継続すべく調整を進めている。